

未来の図書館：調査する住民の立場から

長谷川豊祐[代表], 福島雅孝, 畠山珠美, 井出浩之, 松島茂, 上田直人
(図書館笑顔プロジェクト)

1.背景と目的

図書館員として勤務していた大学職員の頃は、図書館や資料・情報へのアクセスに要する経費・時間をそれほど気にすることはなかった。退職して地域住民の立場となって状況は一変した。地域の図書館利用が日常となり、雑誌論文や洋書、図書館情報学の関連資料の入手には苦勞する。大学の非常勤講師の立場での勤務校の図書館利用や、退職教職員・卒業生の立場での旧職場の図書館利用で救われている。前者の立場が無くなると、普通の住民の立場となり、図書館や資料・情報へのアクセスに要する経費・時間は更に増大する。改めて、地域住民の立場での図書館サービスへのアクセス負担の大きいことを実感している。

本報告を作成した「図書館笑顔プロジェクト」は、以下の目標により2016年11月から月例会を都内図書館研修室で開催・活動している。

- ・本、図書館、教育、地域とは何なのかを、社会や時代を反映した文脈の中で意見交換
- ・意見交換、問題意識の共有により、広く業界関連の課題整理
- ・プロジェクトのチャンネルを通じて、業界への具体的な貢献策の発信・実行

メンバー6名の構成は、地域学の専門家1名、非常勤教員2名、大学管理職1名、大手書店員1名、情報産業社員1名である。図書館勤務経験者4名と民間企業在職2名、日常的図書館利用・未利用の半々。全員が本と書店を利用する地域住民であるとともに、教育・出版・情報産業に関わっている。

本報告は、住民と業界の両方の立場から、広く図書館・出版・情報・教育関連業界について、意見交換・調査を行った中間成果である。未来の図書館は流行のテーマであり、運営・設置・

建設側の立場で取り上げられている。今回は、住民の立場から、地域で生活し、自己責任社会を生き抜くため、自身の興味対象の調査を継続し、情報利用・コミュニティ活動を効果的に行えるような未来の図書館を考えてみたい。住民目線から、最近の出版物のレビューと、学生・住民のアンケートを分析し、未来の図書館への率直な提案を行う。

2.先行研究による未来の類型化

a) 図書館に関する雑誌特集

地域活性化、課題解決、デジタル時代への対応などの雑誌特集が多くなっている(表1)。

表1 図書館に関する雑誌特集(特集名『誌名』年)

(1)行政・設置者による図書館

- ・これからの学校図書館『教育と情報』1978
- ・市民と図書館『[横浜市]調査季報』1986

(2)図書館の使い方

- ・知の共有空間・図書館『文化評論』1991
- ・図書館をしゃぶりつくせ!『別冊宝島EX』1993
- ・図書館へ行こう!『大阪人』2004
- ・本が人を動かす:国際交流の場としての図書館『国際交流』2004
- ・立教大学における学習支援と図書館『立教大学教育開発研究シリーズ』2009
- ・学習環境としての大学図書館『IDE 現代の高等教育』2009
- ・アメリカの大学図書館事情『理大科学フォーラム』2012
- ・おすすめの図書館『ソトコト』2013
- ・図書館の使いこなし方『ビッグイシュー』2015

(3)図書館の応用的使い方

- ・キャンパス図書館とラーニングコモンズ『文教施設』2016
- ・公共図書館のミライ『ガバナンス』2016
- ・図書館へ行こう!!『洋泉社MOOK』2016
- ・図書館は「無料貸本屋」ではない!全国の『本気の図書館』を知ろう『ビッグイシュー』2017

(4)図書館でまちづくり、地の拠点

- ・まちづくりを担う公共図書館とFM『JFMA Journal』2017
- ・進化する図書館『Civil Engineering Consultant』2017

- ・図書館と地域づくり『地域づくり』2018
- ・こんな図書館のあるまちに住みたい『地域人』2018
- ・公共図書館を考える『三田評論』2018
- ・図書館の未来『現代思想』2019

(1)1978-1986年は、行政や設置者による紹介。
 (2)1991-2015年は、図書館それ自体の使い方。
 (3)2016-2017年は、図書館の応用的な使い方への外部的評価の高まり。(4)2017-2018年は、図書館がまちづくりの拠点や知の拠点として、図書館の認知・価値が拡大・再興した。90年代に図書館の社会的認知が拡大した。背景には、伝統的な収集・整理・保管・提供という基本的な図書館機能が構築されていたことにある。図書館の特集を取りあげる雑誌の分野は、暮らしから施設へ、そして地域に変わっている。図書館の伝統的機能が見え難くなっている。しかし、伝統的機能を維持しつつ、新しい価値との融合を実現している図書館もある。

b) 未来の図書館を考える枠組み

佐藤(*1)は、大学図書館で将来重要になる12分野のサービスをあげている。「=>」により公立図書館に読み替えることができる。

- (1)外部電子情報源の提供
- (2)図書館利用の時間的・空間的拡大
- (3)個人に特化したサービス
- (4)学習支援
- (5)研究支援=>議員・行政職員・教員支援
- (6)授業支援=>学校支援
- (7)技術支援
- (8)身体的・言語的アクセシビリティの向上
- (9)社会への貢献=>住民活動への貢献
- (10)内部情報源の発信=>地域・行政資料の発信
- (11)「場所」としての図書館

(12)資料保存

(*1)佐藤千春. 10年後の大学図書館サービス.

Library and information science. 2007, no. 58, p. 1-31.

Brophy(*2)は、21世紀の図書館利用者と学習に注目した8項目をあげている。

- (1)サービスの個別化と認証
- (2)データ保護とプライバシー
- (3)情報探索行動モデル
- (4)図書館利用モデル
- (5)学習と図書館
- (6)ネットワーク学習と図書館
- (7)生涯学習と図書館
- (8)情報リテラシー教育

(*2)Brophy, Peter. Library in the twenty-first century. 2nd ed. Facet Pub. 2007.

3.利用者の立場からの未来

a) 藤沢市図書館利用者アンケート(*3)

2018年の利用者アンケート自由記述からは、改善点として駐車場・駐輪場、トイレ、返却ポスト、蔵書、開館日・開館時間、貸出履歴など、施設・設備、資料、サービスの拡充への基盤部分への要望が多い。レファレンスサービスやデータベースへの要望は寄せられていない。

(*3)調査結果: http://www.lib.city.fujisawa.kanagawa.jp/aboutlib_repo.html

住民一人当たりの貸出数と蔵書数(2016年度)では、小田急沿線4図書館の比較では、藤沢市(4市民図書館11市民図書室)は10.5冊, 3.3冊と、座間市(9.0冊, 3.7冊), 海老名市(6.1冊, 3.3冊), 大和市(7.3冊, 2.9冊)と大きな差はない。基盤部分への評価・要望が大半。

b) 授業グループワークでの図書館への期待

図書館への期待と図書館の効果を、意見を集約するグループワーク「累乗型対話プログラム」により、未来の図書館への幅広い考えを抽出した。慶應義塾大学通信教育課程夜間スクーリング「図書館・情報学」の2015年から2018年に各2回実施した。結果は(表2)の通り。

授業目標は以下の3点を設定している。

- a)課題発見・解決のための情報活用能力の習得
- b)情報メディアと図書館の特徴・仕組みを知る。
- c)情報の収集・加工・発信の演習による理解

グループワーク実施前には、図書館の役割・機能、資料組織の仕組み・効果、メディアの種類・特徴、紙媒体・ネットワーク情報資源の情報検索の講義を終了している。論文作成のモチベーションも高く、図書館利用の知識を備えているため、図書館への期待の幅が広い。

表2 図書館への期待

個別事項

- ・Webサイト上のコンテンツ充実
- ・ICT環境の充実
- ・DB・電子書籍・新聞の充実・貸出・閲覧
- ・検索性能の向上
- ・Wi-Fi環境・
- ・閲覧席の予約システム
- ・貸出履歴の活用・出力
- ・レファレンスサービスの更なる充実
- ・更なる利便性の向上
- ・カーリルとの連携
- ・マイナンバー制度とのリンク
- ・全国共通アプリ

- ・クラウド活用して利便性の向上
- ・有料プレミアムサービス

キャッチコピー

- ・どこでも国会図書館！
- ・集中パワースポット
- ・文化レベルの向上
- ・図書館は世界に広がる窓—楽しく豊かに
- ・生活の中の一部としての図書館
- ・現実と仮想のブラウジング(本との出会い)
- ・知育と生涯学習の「場」
- ・バーチャル図書館(プチ有料化)
- ・情報テーマパーク
- ・ネットと図書館が握手
- ・コミュニティ型図書館
- ・仮想型図書館

4.未来の図書館

プロジェクトの議論は多岐に渡った(表3)。

表3 図書館笑顔プロジェクトの意見交換の内容

行政・設置主体

補助金行政や地方交付税
公共建築と都市計画, 公共施設等総合管理計画
複合施設の得失とライフ・サイクル・コスト
行政法における給付行政・権力行政と競争性・排他性

図書館

戦後の図書館発展過程, 図書館人事・組織・政策
専門職制度と司書有資格者率
自治体組合活動と図書館運動

住民

雇用形態と運営・ミッション
無料原則と有料化・有料サービス, 場所だけの図書館
地域資料の有効性・構築, 利用者と参考業務
最大公約数的な図書館機能・図書館像,
住民・行政・館員間の意思疎通や信頼感

これらの議論の内容をもとに, 未来の図書館を分析した当面の概略は, 以下の5点に落ち着いている。

- 1) 図書館機能を周知すること
- 2) 図書館の基本機能を整備すること
- 3) デジタル化に対応すること
- 4) 住民の立場で図書館運営の改善
- 5) 住民, 地域, 行政・設置主体との共生

おわりに, 住民として, 館種や運営を超えた具体的な提案(Ver. 01)も示す。

- ・レファレンスからインストラクションへの転換: ネットワーク情報資源活用の住民サポート。論文入手には, Google Scholar, CiNii, JAIRO, NDL 登録利用者サービスで十分との住民もいる。
- ・電子資料の充実: DB などの普及・契約は県立の役割となり得る。大学図書館の電子資料活用のノウハウで協力・連携。Wi-Fi など,

ど, 世間並みの ICT の整備。電子図書館の推進・活用・提供・インストラクション。

- ・館種・地域を超えた資源共有: 「どこでも国会図書館」による電子図書館。ドイツにおけるナショナルライセンス契約(DEAL プロジェクト)。現実的には, 館種を超えた実質的な協力により, 公共図書館 4.4 億冊, 大学図書館 3.2 億冊の利用目的の異なった蔵書を利用できる。サービスポイントとしての図書館数(3, 273 館+1, 424 館), 人的資源としての館員(4.1 万人+1.4 万人)も。地域の大学図書館の専門情報の住民への提供。京都府立図書館のディスカバリーサービスの実証実験。
- ・図書館運営の5層構造(案)(表4)による運営の切り分け: 2階部分の分離運営, 有料化。
- ・断片化する知を統合(*4)できる環境の整備
(*4)猪木武徳. 知の断片化の危機回避を. 日本経済新聞. 2019年1月4日(朝刊), p. 19
- ・人間の街(*5)を見直す図書館の働き: 車と人間の立場が逆転した日本の街の復興。
(*5)ヤン・ゲール. 人間の街: 公共空間のデザイン. 鹿島出版社, 2014.

表4 図書館運営の5層構造(案)

未来部分(3階)	AI 映画『タイムマシン』(*6) メディアの変容『EPIC 2014』(*7)
応用部分(2階)	交流, 出会い, ひろば, にぎわい
通常部分(1階)	蔵書, 施設・設備, ひと
基礎部分(土台)	建築, 図書館業務システム, 図書館運営, 図書館協力, 資源共有
立地部分(土地)	設置主体(国, 自治体, 大学), 地域, 住民, Life Cycle Cost, Facility Management, 用途変更の改修, 地域の環境改善ほか

(*6)映画『タイムマシン』の未来の図書館では, 5番街のニューヨーク公共図書館で, 主人公は, ホログラフィーで対応する図書館員(the library's interactive reference protocol, Vox)から, 時間旅行の情報を得る。<https://www.youtube.com/watch?v=Rkc09sTiS7g>

(*7)EPIC 2014 日本語字幕版 (Googlezon など 2004 年製作のメディアの未来を予測) <https://www.youtube.com/watch?v=Afdxq840YIU> 「EPIC 2014(Evolving Personalized Information Construct: 進化型パーソナライズ情報構築網)は, 雑多で混沌としたメディア空間を選別し, 秩序立て, そして情報配信するためのシステムで・・・最悪の場合, 多くの人にとって, ささいな情報の単なる寄せ集めになる。その多くが真実ではなく, 狭く浅く, そして扇情的な内容となる」